

終える命

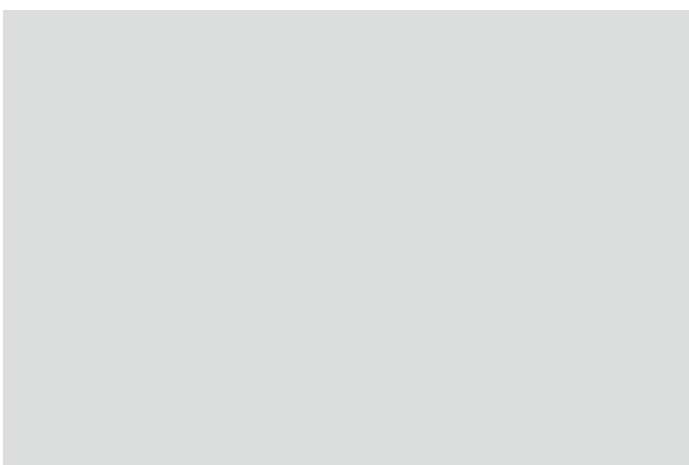
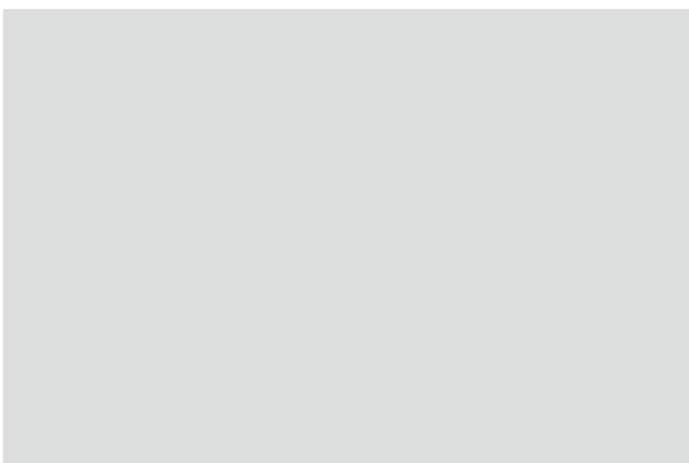
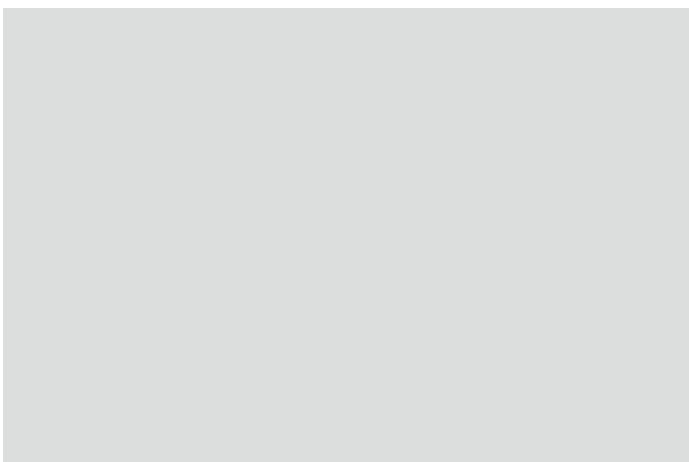
つなぐいのち

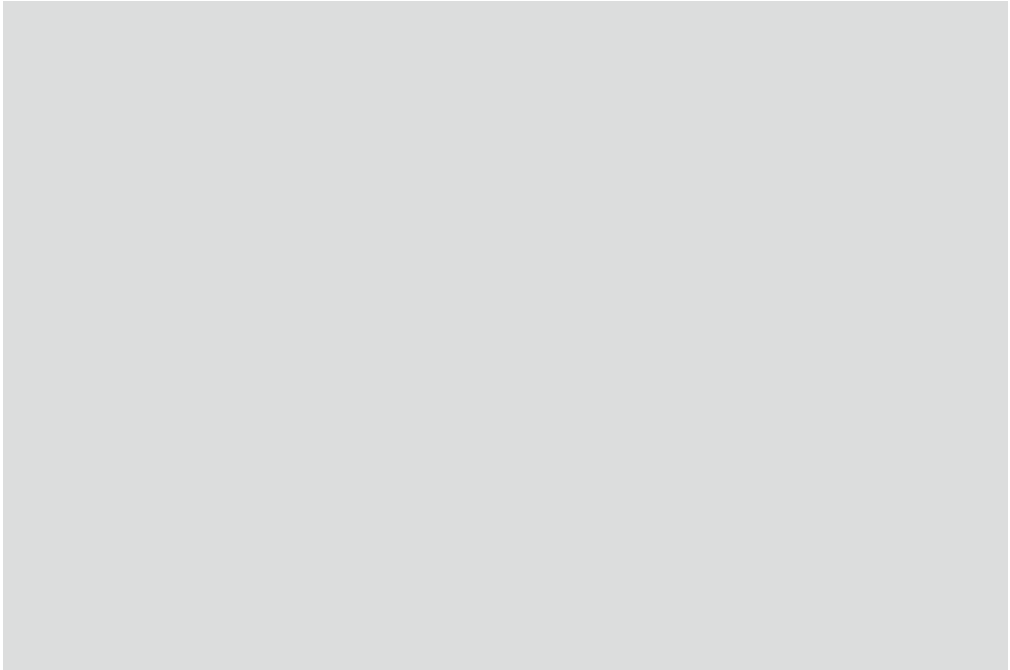
國森康弘

第7回 暮らしのなかの老病死

※本連載は、本文のみ無料でお読みいただけます。
写真は、冊子版でのみご覧いただけます。

目で語る。





バトンリレーは連綿と、
続いてゆく。

滋

賀県東近江市の永源寺地域に暮らすいとさんは、手足が震えたり、筋肉がこわばったりするパーキンソン病と、認知症を抱えていた。

自宅で、働きざかりの息子さん夫婦や成長著しい孫たちとの、三世代で過ごす日々だった。いとさんは寝たきりになり、褥瘡ができ、日に日に「弱って」いくように見えた。

別れが近づいている……。いとさんの旅立ちを予感するなか、仕事、学校、部活、習い事……と、家族はいつそう大切に日常生活を重ねた。

行き帰りには、いとばあちゃんの様子を見て、声をかける。夜は同じ部屋や隣の部屋で眠るようにした。

「近所さんもよく顔を出してくれた。

「世話になったね、お疲れさま」

「わしらもあとから、追いかけるから。先にあつちに逝って、みんなでまた待つという。それで、ようよう出迎えてえや」

いとさんの手を握って、口々にいたわった。

いとさんの口からは言葉はもう、出ない。けれど、その目が何かを語っていた。

息子さんには「あとを、よろしく頼むわ」、お嫁さ

んには「嫁いで来てくれてから今日まで、いろいろ、
ありがとうね」、孫たちには「幸せになるんだよ」、
ご近所さんには「そろそろお迎えのようだから、お先
に」……。

9割近くの人が自宅以外で亡くなっている今日の日
本において、いとさんの「死」は暮らしのなかにあった。
ずっと昔から続いてきた命のバトンリレーの壮大さ
は、ご先祖様20代で、ゆうに100万人を超えるその
数が物語る。100万人のうち1人でも欠けていれば、
自分はこの世に存在していない、という神秘と、ご縁
の積み重ねを感じずにはいられない。

命には限りがあるけれど、ご先祖様から代々受け継
ぎ、自らも一生懸命蓄えてきた生き抜く力という「命
のバトン」は、個として、あるいは総体として、いつ
か次の世代に手渡していくものだろう。

いとさんの家族や友人もまた、それを大事に受けと
め、引き継いでいるようだった。

最期まで自宅で過ごして、命をまっとうしたいとさ
んの、冷たくなっていく身体を、孫たちが大事に拭い
た。唇を湿らせ、お肌の手入れをする。最後に、口紅
を塗った。

〈2011年に、滋賀県東近江市で撮影〉

くにもりやすひろ●写真家。イラク戦争を機に新聞社から独立し、紛争地や貧困地域などの現実を伝えてきた。
2008年から日本の「在宅看取り」の現場を撮り始める。写真絵本『いのちつぐ「みとりびと」』シリーズ（農文協）ほか。